小田原における旧横井夜雨別邸・茶室「廂庵」の実測調査について

人文・社会科学系　白井 洋平
岡山 理香

はじめに

今回、小田原にある横井夜雨（半三郎）氏のご子孫である斎藤氏から、土地と家屋の転居につき、家屋の一部に附設する茶室についての調査を、東京都市大学・岡山研究室が行うこととなった。横井夜雨氏と言えば、三井財閥の創始者である益田鈍脳と親交が深く、美術品の蒐集家・茶人として、また茶室の研究家として知られる。横井夜雨氏は裏千家の茶人であり、当時多くの茶人と親交があった。

現在、日本において相続他多様な問題から、昭和初期に建てられた木造住宅が次々と解体されている。またそれに伴い個人所有されていた茶室も解体が進んでいる。個人で所有される茶室は世間に公開されることが少なく、誰にも知られることなく解体されるのは非常に残念である。その為今回、資料として記録しておく事となった。

更に、本茶室の調査により、小板から「数寄屋師　清兵衛」の焼印が見つかった。数寄屋師清兵衛とは木村清兵衛のことを指すと思われ、既存の研究[(1)]から焼印の存在も知られている。その事からも本茶室を調査・記録することは非常に意義のあるものと言えよう。

1. 調査目的と手法

本研究は茶室・廂庵を調査し、資料として記録することを目的とする。調査手法は、現地での主屋及び茶室の実測、平面図・展開図の作図、内観・外観の写真の撮影とする。なお、本茶室における建立の経緯・沿革についてより、建築的特徴を重要視し、観察するものとしたい。最後に木村清兵衛の焼印の入った小板についても言及を行う。

2. 調査メンバー・日程

本調査は、筆者の所属する東京都市大学の岡山研究室（岡山理香准教授、研究補助要員・白井洋平）及び、同大学の建築学科生（川島俊哲、玉井宏典）の協力によって行われた。

以下に調査日程を示す。

① 2014 年 3 月 14 日　岡山　廂庵での茶事に招かれる
② 2015 年 5 月　1 日　岡山　現地見学及びインタビュー、現況調査・写真撮影
③ 2015 年 5 月 20 日　岡山、白井、川島、玉井　現地実測・写真撮影

都合上、機会・時間ともに多くは取れなかったが、今後の調査のためにも、今回の調査結果を記しておきたい。実測図面の作図は、白井が担当した。

3. 旧横井夜雨別邸について

旧横井夜雨別邸は神奈川県小田原市にある。図 -1 に示す通り、敷地は北東を県道、南西を私道が走り、南東・北西を隣家に囲われる。廂庵は主屋の一番南西に位置し、敷地の中央に位置する。同敷地内南西角には飯後庵という茶室のあった住居があり、現在はＳ夫妻が住まわれる。聞き取り調査により主屋は 1923（大正 12）年の関東大震災以降に建てられた事が分かっている。更に 1936（昭和 11）年に書かれた配置図及び平面図が残っており、現況配置図の作成に当たって参考にした。図面から主屋が南西方向に増築を繰り返している事が分かる。廂庵は 1936（昭和 11）年の図面に記載がない事から、それ以降に移築もしくは新築されたものだと考えられる。

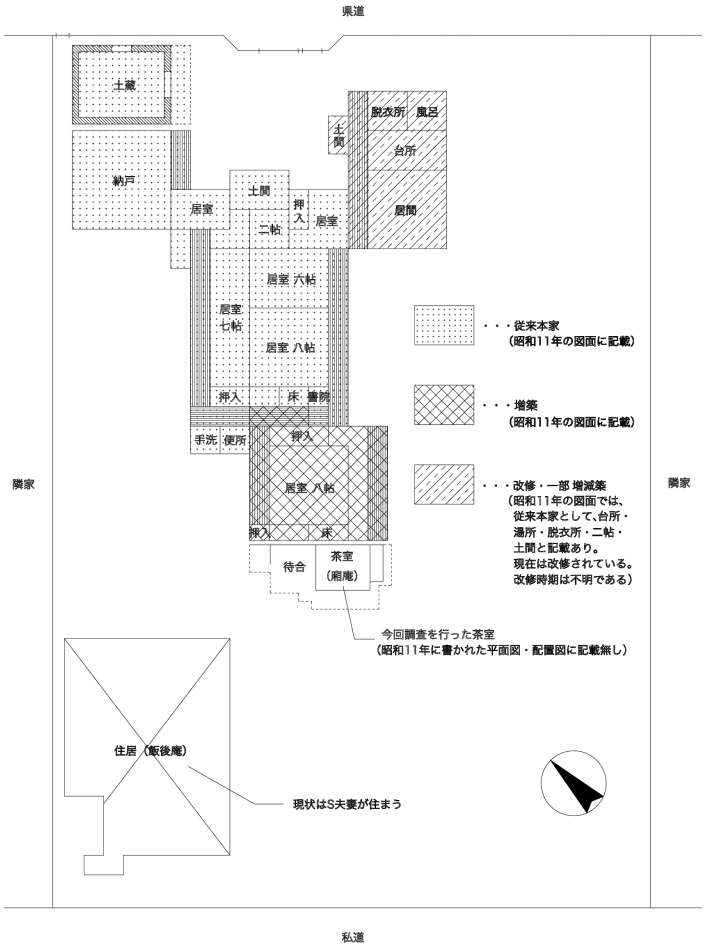
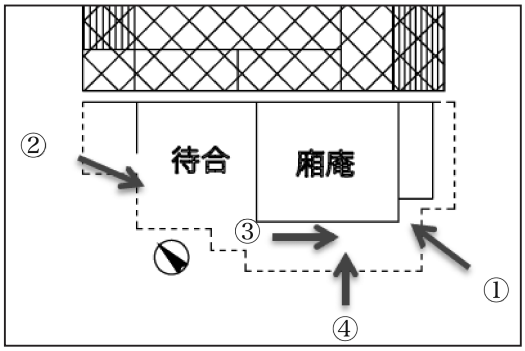


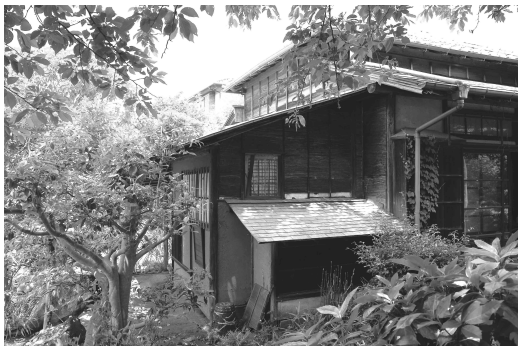
図 -1　現況配置図　（現地実測及び、上記の当時の図面を参考に作図を行った）

4. 外観

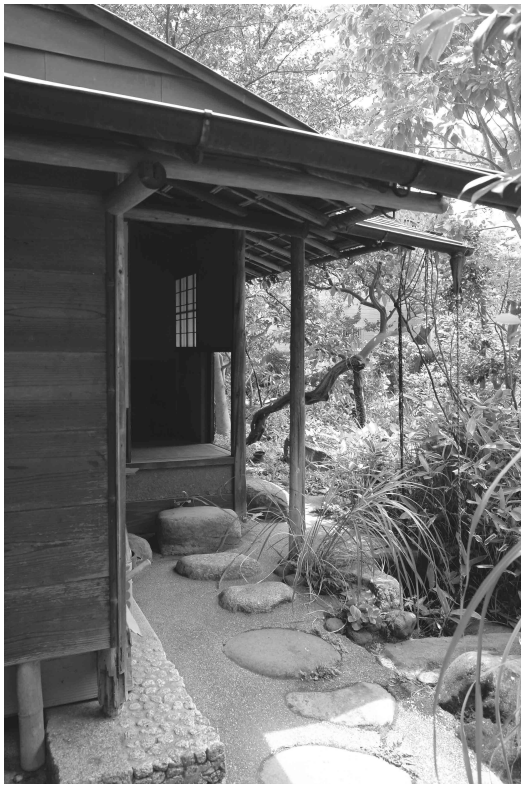
廂庵は主屋に附設している。庭には草木が生い茂り、飛び石が配置され、茶室への導線を作り上げてある。銅板葺きの片流れの屋根に水屋が付いており、屋根は待合も覆う形で続いている。茶室の居室部分は瓦によって二重に水の浸入を防ぐような工夫も見られる。外壁は基本土壁だが、南西面は土壁に木の板が打ち付けられている。



撮影箇所（外観）



① 外観全景



② 腰掛け待合

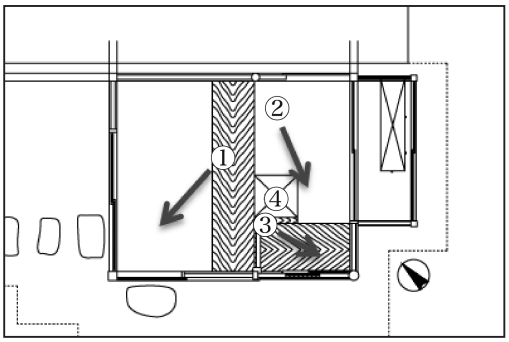
③ 外部 上げ裏

④ 躙口と連子窓

図 - 2 外観写真

5. 内観

廂庵への入り口は主に三つ。主屋からの接続部分である茶道口、待合部分に接続する貴人口、そして躙口である。開口が非常に多く、下地窓が二つ、連子窓が一つ確認出来る。窓周りは晒し竹の意匠が使用される。中柱は皮付きの丸太が使われ、天井にも竹が使用されている。外壁と同様内部も土壁で覆われ、足元には反古張りが見られる。全体的に装飾を排し、自然の素材感を残した造りとなっている。



撮影箇所（内観）

① 内部 天井

② 内部 東側を見る

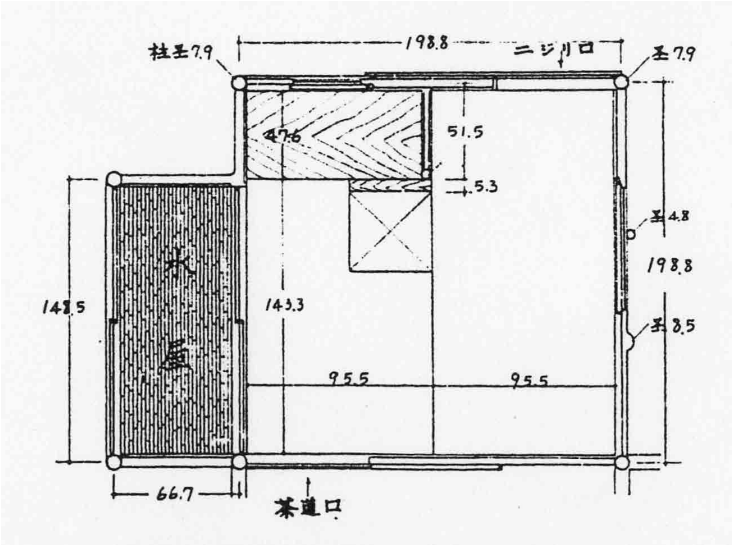
③ 内部 天井

④ 炉と裏返した小板

図 - 3 内観写真

6. 平面図

廂庵は、裏千家の今日庵に酷似している。図 -4 にて平面図の比較を行った。単位は cm（センチメートル）で表記した。各種の寸法は微差である。平面から判明する違いは、中板の有無、客座背面が貴人口か下地窓であるか、この二点。他には、今日庵は袖壁が床まで下りているが、廂庵は途中で止まっている。水屋についても、今日庵は向板の方に通し棚が寄っているが、廂庵の通し棚は茶道口側に寄っている。寸法の微小な違いを除けば、今日庵と廂庵の違いは以上の四点である。



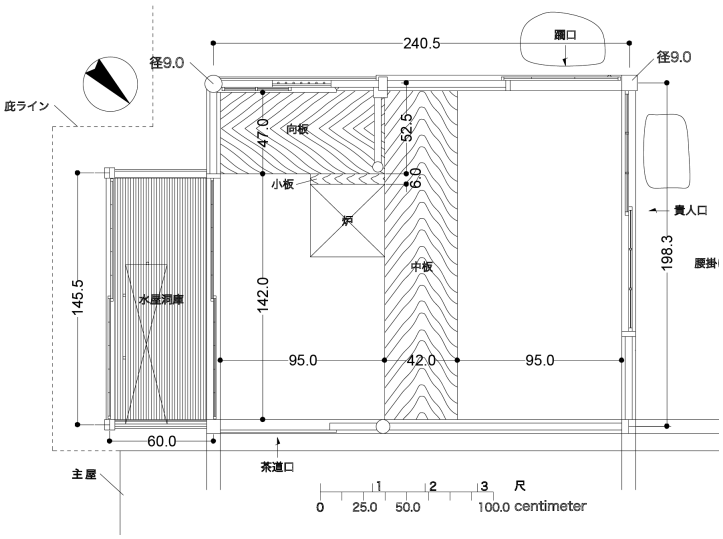


図 -4　上：今日庵　平面図 (2)　下：廂庵　「平面図」（実測に基づいた作図）

7. 展開図

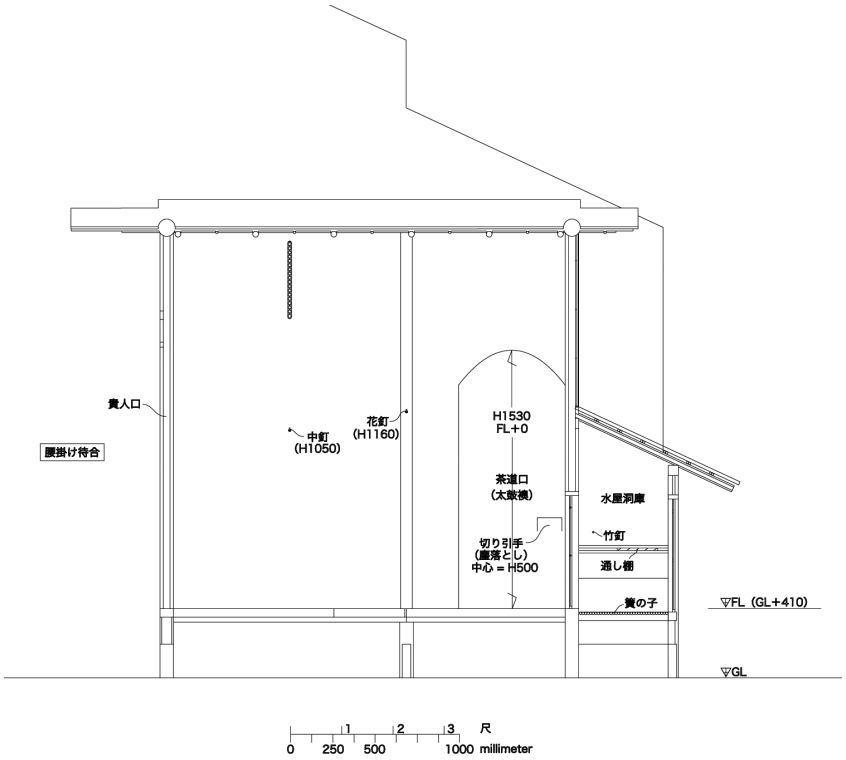


図 -5　北東面　展開図

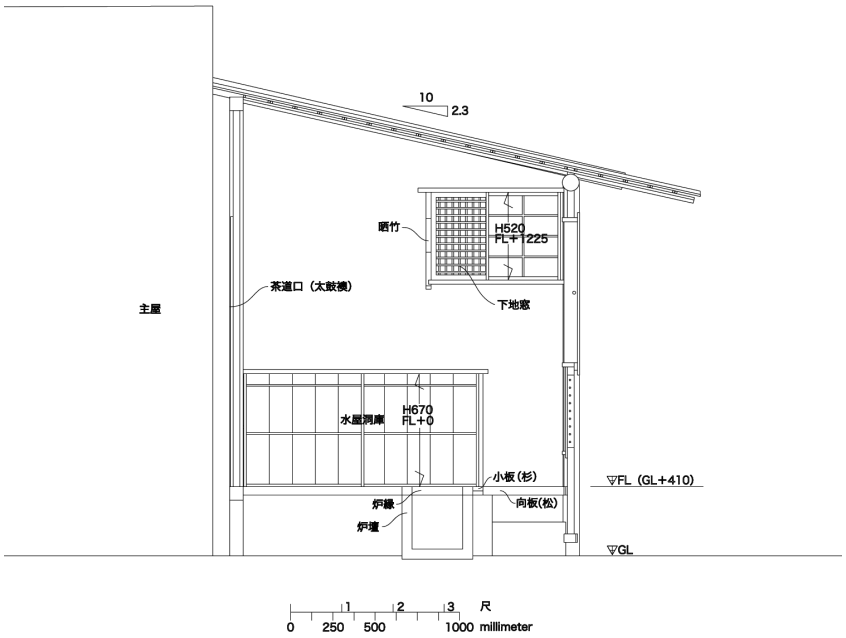


図 -6　南東面　展開図

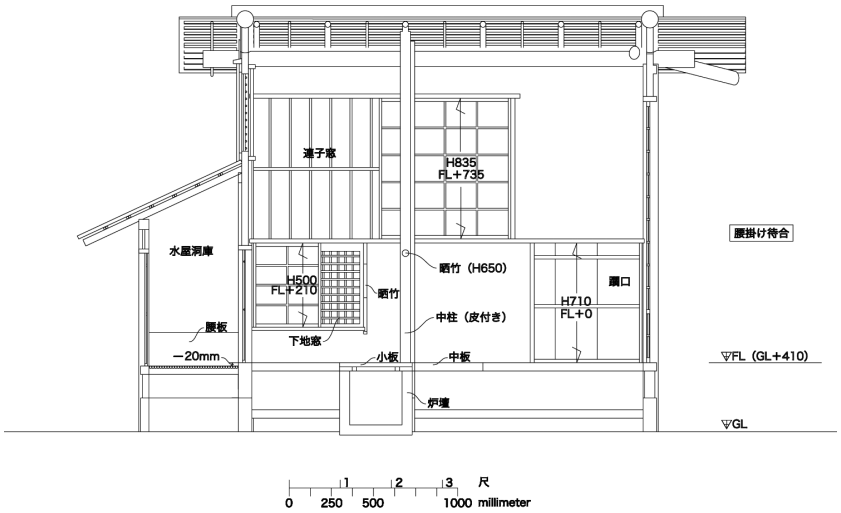


図 -7　南西面　展開図

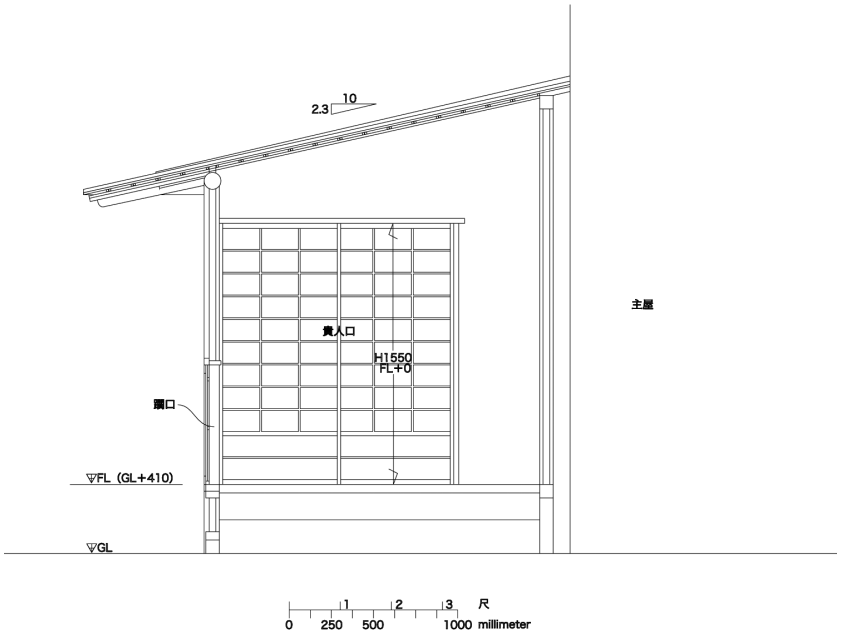
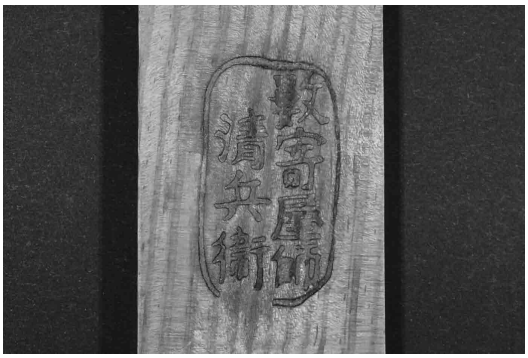


図 -8　北西面　展開図

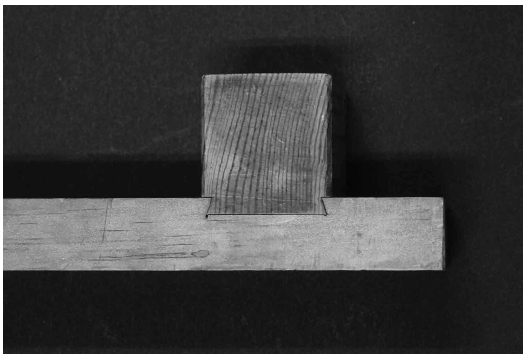
8. 小板と焼印について

廂庵は向切・本勝手（入炉）の一畳台目中板の茶室である。炉の切り方において「向切」「隅炉」は本来壁付きの炉なので、畳寄せの下に炉壇が収まる。炉壇を上に引き出しやすくする為に小板を炉の向こう側に入れて、小板をはずせば、取り外しが簡単にできるようになっている。[(3)] 廂庵は畳寄せではなく向板であるが、同様の理由で小板が置かれている。また向板がある場合、小板は杉で作られる。[(3)] 廂庵の小板の寸法は、全長 425mm（≒十四寸）、幅 53mm（≒一寸八分）である。

廂庵の小板は三つの部材からなり、焼印が押されている主部材に足となる二つの部材が仕口の手法で取り付けてある。この手法は蟻桟 [(4)] と呼ばれ、板などの反りや分離を防ぐ為に施される。小板のある茶室の一つとして、東京国立博物館の庭園にある春草廬が挙げられるが、春草廬の小板には蟻桟の手法が確認出来なかった。蟻桟という手法は通常、家具などを手掛ける指物師が良く使用する手法であり、造ろうとするサイズに合った蟻鉋 [(4)] などの専用の道具と高度な技術が必要となる。小板裏の焼き印は、清兵衛のもつ高い技術力の証であろう。



焼印詳細



側面　蟻桟詳細

図 -9　廂庵　小板詳細写真

註

(1)　中村琢巳「木村清兵衛と増田鈍翁による二席の燈心亭写し茶室–諦聴寺「花雲」と旧久邇宮別邸「花雲亭」について」『建築史学』第 58 号 2012 年 80 頁 「数寄屋師　清兵衛」の焼印の存在について言及している。

(2)　岡田考男『三千家の茶室』茶室研究会　1961 年　今日庵の実測図面を引用。

(3)　飯島照仁『ここから学ぶ茶室と露地』淡交社 2011 年　八通り炉の切り方と小板の収まり及び、小板が配置される意味を説明している。また、小板の木材の材料についても言及がある。

(4)　『建築大辞典第 2 版』彰国社 1993 年　蟻桟及び蟻鉋に関する説明がある。蟻桟は別名「吸付き蟻桟」と呼ばれる。蟻鉋とは「蟻掛け鉋」ともいい、蟻形の溝や入隅の部分などを削る鉋の事をいう。

謝辞　今回調査させて頂くにあたり、便宜を図っていただいた斎藤和子様、実測に協力いただいた川島俊哲君、玉井宏典君、数々の指導をして下さった岡山理香先生に、この場を持って感謝申し上げます。